



日本における 塗料工業の始祖

もてき じゅうじろう
茂木 重次郎 (1859~1932年)



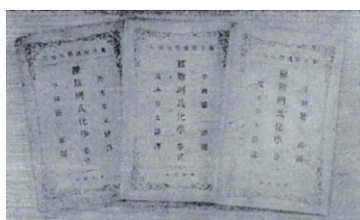
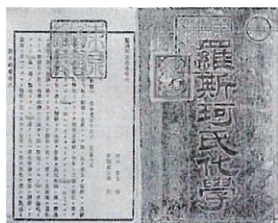
■日本ペイントホールディングス 株式会社

本社所在地：大阪府大阪市北区大淀北 2-1-2 従業員数：20,257名(連結 2017年12月現在)
創 業：1881(明治14)年3月14日 資本金：788億6千2百万円
事業内容：塗料全般(自動車用・工業用・汎用・船舶用)の開発・製造・販売
表面処理剤等の開発・製造・販売

兄の背中を追いかけた青年時代

かつて豊臣家が居城とした郡山城のお藤元、大和郡山藩(現・奈良県大和郡山市)に、茂木春太と重次郎の兄弟は生まれた。当時の奈良県知事は旧藩士の子弟教育、中でも特に英語教育に熱心であったため、郡山城内に英語学校を開設し、成績優秀者には育英資金を下附することで東京留学を奨励していた。茂木兄弟はともに成績優秀であったことから、兄・春太が1870(明治3)年に、弟・重次郎は1874(明治7)年に、育英資金により特待生として東京留学を果たした。留学後、慶應義塾に入塾した兄の背中を追うように、重次郎も上京早々入塾を希望したが規定の年齢に達していなかったため、ひとまず誓願寺変則英学塾を経て翌年15歳で念願の慶應義塾に入塾、その2年後には今の東京大学の前身である開成学校に入学した。

10歳上の兄・春太は、重次郎が慶應義塾に入塾した年から開成学校に勤めており、外国の教科書の翻訳を担当していた。その時に翻訳していたのはイギリスやアメリカの化学の教科書であり、英語だけでなく化学にも慣れ親しんだ。



兄・春太と訳著



おしろい 無毒白粉の製造に挑戦

開成学校を退職した春太は東京女子師範学校(現・お茶の水女子大学)で英語の教員に転身した。その折、同僚であった宮川保全の親類で薬屋を営む山崎塊一から、毒性のない白粉のことで春太に相談が持ちかけられた。当時白粉には鉛が使われており、役者や女性には白粉を常用することで健康上の弊害が出ていた。そのため無毒の白粉は作れないだろうか、という話だった。西洋の白粉には有毒の鉛が入っていないということ、そしてその代わりに物質が亜鉛華であることを、前職で化学に携わっていた春太は知っていた。

無毒白粉の話が出て間もなく、春太と宮川保全、山崎塊一の3人はそれぞれ開発資金を出し合って白粉用亜鉛華製造組合を創設した。重次郎は開成学校在学中から顔料や塗料に興味をもっており、組合が設立されてからは毎日亜鉛華の製造に従事した。しかし、製造設備に多額の資金を要することから、組合による共同事業の話は消滅、春太と重次郎の兄弟は独立する決意を固め、1878(明治11)年、「大和屋重次郎商店」を開業した。

亜鉛華の精製に苦戦

亜鉛華は金属亜鉛を酸化させて製造するのだが、その酸化方法には硫酸などの液体を用いる沈殿法と、高熱を加える乾留法とがあり、重次郎はまず、あまり設備を必要としない沈殿法で着手した。しかし、この方法で製造したものは不純物が多く、顔料としての用途には品質が不十分で、白粉にも塗料にも使用できなかった。

乾留法については、窯を作り、坩堝を備え、その中に亜鉛を入れて下から熱し、高温によって亜鉛を蒸発させることで亜鉛華ができるという理屈はわかっていた。しかし、窯の形はどうすればよいのか、窯を作る耐火レンガはどこに行けば手に入るのかなど、具体的なことはなにもわかっていたいなかった。

そこで鑄造家や鍛冶屋に問い合わせるなどしてようやく、へな土、伊豆の天城山の白土、荒木田などの土が高温に耐えるものであることを知った。そして伊豆やその他の地を直接訪れて土や粘土を購入した。原料は手に入ったが、各種の耐火土の配合がわからず、毎日失敗を繰り返しながら試行錯誤した。窯だけでも数十回のやり直しをして、ようやく木炭を燃料とする亜鉛華の試作に成功した。これがわが国初の国産の亜鉛華であった。

厳しい経営— 顔料としての亜鉛華発売へ

資 金調達が厳しい状況の中、1879(明治12)年には亜鉛華の製薬免許が下り、その生産・販売が公認されるに至ったが、販路が薬用に限られたため販売量が少なく、依然経営は苦しかった。加えて、家財を処分して工面した資金1,500円のうち500円を銀行に投資していたが、その銀行が突然の破産、投資金は回収不能となり、経営状況はますます追い込まれていった。

この状況を打破したのが、亜鉛華の顔料用としての販売開始だった。当時、大蔵省印刷局では朱肉に練り込むために亜鉛華を必要としていたのだが、自製を目指して同局が試作に乗り出したものの、顔料に適する品質のものは作り出せなかった。印刷局の担当者は何度も重次郎のもとへ製法を探りに来たが結局断念し、印刷局は重次郎から亜鉛華を購入することになった。大和屋にとって初めての大口顧客ができたため、ようやく経営も安定し、顔料用としての亜鉛華の販売も本格的に開始した。

日本初「国内産洋式塗料」製造に成功

店 の経営が安定すると、重次郎は念願の洋式塗料「ペンキ」の研究を開始した。塗料製造には高度な知識と技術が必要であり、決して容易なものではなかった。当時はまだ液体の塗料ではなく、塗装の時に顔料と植物油を混入するセパレートタイプの塗料が使われていた。

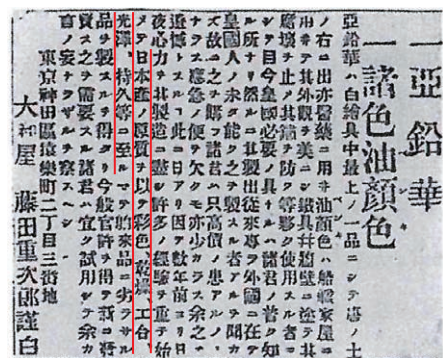


亜鉛華製造免許

伊藤博文内務卿から下賜された亜鉛華の製薬免許之証。当時、亜鉛華は白粉や火傷の薬として、薬屋で扱われた。

この混合の技術は塗装職人の間に伝承されていたため、重次郎は店に来る塗装職人から知識を得るなどしていた。輸入塗料の詰め替えや水増しで巨利を得る商売人がはびこるなか、重次郎は独力で日本における塗料の道を切り開き、国産技術の確立に情熱を燃やした。

1880(明治13)年の春、ある日の新聞に重次郎の名前入りで広告が掲載された。「日本産の原資を以て彩色、乾燥、工合、光澤、持久等に至るまで舶来品に劣らざる品を製するを得たり」——重次郎は約1年の歳月をかけ、晴れて塗料の国産化に成功したのだった。



東京日日新聞に掲載された発売広告

亜鉛華・諸色油顔色(ペンキ)の国産化成功と記載されている。

歩みを始めた矢先の不幸

国 産塗料はすぐに話題を呼び、重次郎の塗料事業は着実に軌道に乗っていった。翌年、東京上野公園で開催された内国勸業博覧会には塗料と亜鉛華を展示し、塗料においては褒状を受け、そのことが宣伝となって店の客足はさらに増えた。また、重次郎の噂を聞きつけた海軍に塗料油を納入している人物から、塗料製造事業を共同経営したいという話が持ちかけられた。当時の海軍の塗料管理者であった中川平吉は、塗料工業の発展は国家的重大問題であるとして、共同事業化実現に協力的であった。そのような背景もあり、重次郎を含む数人での共同組合設立の計画が着々と進められた。

共同事業計画の準備が進む中、突然の不幸が重次郎に降りかかった。重次郎を化学の道に導き入れた兄の春太が、病により33歳の若さで突然この世を去った。ともに亜鉛華の製造に尽力した仲間であり、重次郎にとっての人生の指導者でもあった。その兄を失い、悲しみの淵に立たされた重次郎は、これまでも増して一層の努力をもって塗料事業に励んでいくことを決意した。

悲しみを乗り越え 塗料会社として本格的に始動

1 881(明治14)年10月、東京市芝区(現・東京都港区)に、「共同組合光明社」が創立された。当時は海軍塗工長である中川平吉の指導を受けて塗料を生産し、製品のすべてを海軍に納入する海軍専属塗料工場であった。また、中川平吉の尽力もあって1年程の歳月で溶解塗料の国産化にも成功し、経営に弾みをつけた。1888(明治21)年以後は塗料の民需も増加し、製造品目も格段に増え、その後、少数資本主による合資会社に改組した。

塗料生産の8割以上が白色塗料であったこの時代、純白の塗料を生産するためには純白の亜鉛華を必要としたがその生産ができず、紺青を混入することで青味によって純白度を視覚的に増す手法が用いられていた。1894(明治27)年、一人の工員が一度できた亜鉛華を再度反射炉に入れて焼き直すと、純白になるということを発見した。重次郎はその原因を追究し、石炭中の硫黄により発生する亜硫酸ガスの作用によることを突きとめた。重次郎はこの技術を「亜鉛華精製法」として出願し、1897(明治30)年2月に特許を得た。

さらに、1898(明治31)年にはすでに持ち上がっていた新工場建設計画を拡大発展させて、東京と大阪に2大工場を建設。それに伴い、参加者多数による株式組織とすることに決まり、新会社を「日本ペイント製造株式会社」と改めた。その際、創成期の立役者であった中川平吉の「中」の字を意匠化し、小槌の図柄として商標登録した。なお、桜は海軍のシンボル、光の文字は光明社をあらわしている。



商標登録「槌印」

同社ではこれをこころの怠惰を打つ「槌」として社員の訓としている。

船底塗料の開発に成功

日清・日露の両戦争を経て、日本は海軍力、海運力ともに増強の一途を辿った。これに伴い、舷側、船外および船内用塗料の大半は、日本ペイント製造にて賄われたが、船底塗料のみはまだ全面的に輸入に頼らざるを得なかった。これは船底塗料が一般塗料

とは異なり、防汚、防錆および耐水性の面で特殊な性能を必要とする特殊塗料のためであった。役員会議の結果、いつまでも輸入に頼るのではなく自社で製造すべきであると、1906(明治39)年、農商務省の補助金を得て船底塗料の開発に着手した。開発担当者はシベリア経由でイギリスに直行し、所要の調査をしてドイツおよび近隣を視察、アメリカを経て帰国するという、当時ではかなり大掛かりな欧米視察に出された。

多くの関係者や担当者の尽力の末、着手から6年後の1912(明治45)年に「日本船底塗料」として発売された。



塗板見本額

内国勸業博覧会に出展された日本最古の塗見本

栄誉の緑綬褒章

亜鉛華精製法、塗料用鉛丹の開発、調合ペイント、滬過器の研究と、輸入品および輸出振興の功績により、1911(明治44)年、重次郎は、長年にわたり社会奉仕に従事し、顕著な実績を挙げた者に贈られる緑綬褒章を授章した。その光栄を祝して、同年2月4日に東京本社においてほぼ全員が出席する盛大な祝賀会を開催し、さらに席を改めて重次郎ゆかりの人物たちを招待し、その恩を謝し功を労った。



授章当時の重次郎(左)と褒章之記(右)

業績不振を救った“中興の祖”

1 920(大正9)年には世界大戦による好況の反動で日本経済は逼迫、同社も創業以来初めての業績不良、赤字決算に際し、主要役員はその責任を取って退任し、後事を小畑源之助に託すこととなった。

明治末期以降、経営の多角化を進めてきた同社であったが、小畑は東京と大阪の顔料・塗料専門工場のように事業を縮小し、原材料購入の実態と工場の在庫状況については徹底的な調査を行い、在庫の死蔵品を明らかにすることで、これを整理活用して企業再建に役立てた。

また、この経営危機を乗り越えるためには社員に安心してもらうこと、そのうえで一致協力してもらうことが必要であると考えた小畑は、決算情報や賞与の分配法などの情報を社員に公開した。情報公開だけでなく、「大家族主義」や「重役の職務専念」などを説き、社員を大切に、上役の横暴を戒めた。まだ封建時代の名残がある当時としては先進的な手法であったが、社員からは大きな支持と協力を得た。

さらには企業運営の民主化を図るため社員持株制度を推し進め、社員中の株主を増やすことで社員一人ひとりが経営の一翼を担っているという意識を醸成した。

販売に関しては、小畑の「特約店は会社の相手方ではなく会社の延長であり、共に手を取って勤む仲間である」との信念を特約店の店主に伝え、西の『大黒会』と東の『恵比須会』の連絡会が発足した。そして社員同様、特約店に対しても会社の実情を公開し株の保有を推進することで、特約店からも多くの株主が現れ、固い結びつきが確立された。

小畑は「自己資本の枠を越えての事業拡大は行わない」を基本姿勢に、資金繰りの改善にも徹底的に努め、新方針発足からわずか10か月後の1921(大正10)年4月には純益が25万円にまでに回復した。

その後も、小畑の卓越した手腕と「共存共栄」を重んじる誠実な経営で、同社の事業は拡大を続けた。



小畑源之助

1875(明治8)年生まれ。兵庫県但馬国出石郡藤ヶ村(現・豊岡市)出身。

1924(大正13)～1945(昭和20)年同社の社長を務める。戦後も関西財界をリード、大阪商工会議所常議員、大阪工業会、大阪府工業懇話会各会長などを歴任した。

塗料業界のパイオニアとして――

株 式会社改組より30年が経過したことを機に、1927(昭和2)年には「日本ペイント株式会社」へと社名を改め、大阪と東京の営業所を支店へと格上げした。

1932(昭和7)年3月3日、同社の発展を見届けるように、重次郎は自宅で静かに息を引き取った。事故で怪我を負ったあとの自宅療養中のことだった。重次郎の逝去に、社員はもちろん、塗料業界その他からもその死が惜しまれた。告別式は多数の参列者が重次郎の遺徳をしのび、盛儀となった。

現在、同社の掲げる経営理念には「塗料とコーティング技術の持つ力を高めることで、生活に彩と快適さ、安心を提供します」「日本の塗料工業を興したパイオニア精神を引き継ぎ、未来への革新に挑戦し続けます」「わたしたちのMission(使命)の達成を信念とし、あきらめることなくかつ柔軟にやり抜きます」などの言葉がある。

10代で故郷を飛び出し、白粉による鉛中毒で苦しむ人々に胸を痛め、兄・春太とともに亜鉛華製造の会社を立ち上げた重次郎。その生涯を通して持ち続けたチャレンジ精神と、兄を失った悲しみにも負けずすべてをやり抜いた不屈の精神は、同社の理念として今日の社員にも連綿と受け継がれている。

歴史館のご紹介

日本ペイントホールディングス(株)の本社(大阪市北区)にある「歴史館」で紹介している展示内容は、百三十有余年に及ぶ同社の歩みであると同時に、日本の塗料工業の歴史でもあります。



(同社公式ホームページ)

<https://www.nipponpaint-holdings.com/>



日本で初めて洋式塗料を製造して以来、130年以上にわたって日本の塗料業界のリーディングカンパニーとして歩み続ける。国内で唯一、塗料と表面処理を総合的に扱うメーカーとして、幅広い技術・サービスを提供している。